

第 2 回気象庁モデルフォーラムについて*

足 立 崇**

近年、数値モデルの利用については、気象庁のみならず大学や研究機関を中心とした活用が拡大してきている。モデルというものは基本的に自然現象を再現することが目的であり、そのためには多数かつ多面的な検証に耐えることが必要である。従って、多くの人の活用から得られた情報をフィードバックすることにより、モデルの精度も向上するというのがモデル開発の特性である。

気象庁では、1999年11月に新たなモデル開発体制の確立のため、モデル技術開発推進本部を設け、地球科学分野での技術発展への貢献とモデル技術への知見の摂取のため、国内諸機関との連携の強化をはかることとした。そして、気象庁のみならず、国内の開発担当者間のモデル開発に関する定期的な技術交流の場として、モデルフォーラムを計画した。2000年5月23日に、気象研究所講堂（茨城県つくば市）において第1回気象庁モデルフォーラムを開催したところ、約150名の参加者があり非常に盛況であった。第2回目の気象庁モデルフォーラムは、2001年5月10日に東京大学山上会館（東京都文京区）で、気象学会春季大会に引き続く形で開催したが、今回も約150名に及ぶ参加者を得て、盛況のうちに終えることが出来た。会場等、便宜を与えて頂いた東京大学と関係の方々にお礼申し上げる。

第2回気象庁モデルフォーラムの概要は次の通りである。

① 2001年3月に更新された気象庁計算機で、防災（雨、台風）に力を注ぐことや季節予報などに力をいれていることなど、現在実施されている数値予報の説明が行われた。特に衛星データの飛躍的な増加が予想されることに対して、それを取り込むことが重要である

ことが説明された。また、気象庁のモデル改良に対して、雲・放射過程の扱いなどにさらなる改善の余地があるのではなどの意見交換がなされた。

② 多機能で高精度のモデルは、気象業務にも気象学にも欠くことができないインフラであること、価値観の異なる大学・研究機関と気象庁がモデル開発で協力することは双方に有益という指摘があった。また、大学での気象庁モデルを用いた研究の成果の実例やその使い勝手についての感想などが紹介された。気象庁モデルを利用する場合には、日本語で開発者と研究者のコミュニケーションがとれること、高度な研究のための改造が容易であることなどから、研究を進めることに役立つとの話があった。また、その研究の過程で発見されたバグについての情報が気象庁に提供され、モデルの改良に寄与したことが報告された。更に、今後の問題として、モデルを動かすデータが利用しやすい形で提供されることを期待したいとの要望があった。

③ 気象庁と電力中央研究所からは、2001年度から5年計画で共同で取り組むことになった長期再解析の説明が行われた。参加者に対し、長期再解析の結果得られたプロダクト・出力の評価については、手間がかかるが、研究テーマとして多くの興味深い情報を含んでいることから、長期再解析のプロダクトを用いた評価・研究への参加が呼びかけられた。

④ なお、昨年度の第1回気象庁モデルフォーラムをきっかけとして、気象庁モデルの貸与が大学・研究機関に拡大しモデルに関するコミュニティが広がったことや、長期再解析の共同研究が始まったことは、このフォーラムの成果の一つと考えられる。

プログラムは以下の通りであった。

◎第2回気象庁モデルフォーラム

日時：2001年5月10日（木）18時00分～20時30分

場所：東京大学 山上会館大会議室

* Summary of the second forum on JMA numerical prediction models

** Takashi Adachi, 気象庁総務部.

© 2001 日本気象学会

参加者：約150名

概要：

はじめに：足立 崇（気象庁総務部）
[司会] 佐藤信夫（気象庁数値予報課）

1. 気象庁の新しい数値予報システム
：露木 義（気象庁数値予報課）
2. 気象庁モデルを使った研究について
 - (1) 数値モデルに関する気象庁と大学の研究協力について
：岩崎俊樹（東北大学大学院）
 - (2) 気象庁モデル利用の実例
 - ア 「ポーラーロウ」のシミュレーション
：柳瀬 亘（東京大学海洋研究所）
 - イ 気象庁NHMと英米国のメソモデルの比較

など

：中村晃三（東京大学海洋研究所）

3. 日本の長期再解析計画について
 - ア 気象庁の取り組み
：小出 寛（気象庁気候情報課）
 - イ 電力中央研究所の取り組み
：筒井純一（電力中央研究所）

(注) 気象庁では、2000年7月から大学・国立研究所から気象庁モデルを研究目的で利用するための申請があった場合には、一定の利用条件遵守を条件に、①MRI/JMA非静力学モデル、②JMA領域モデル、③JMA/MRI全球大気モデルを貸与している(問い合わせ先：気象庁総務部企画課技術開発調整官)。



教官（北海道大学大学院地球環境科学研究科）の公募

当研究科では下記により教官を公募いたします。

記

職名および人員：教授1名

所 属：大気海洋圏環境科学専攻化学物質循環講座

研究と教育分野：大気海洋を中心とした物質循環研究を広い視野に立って展開して行く方。特に、化学物質（放射性同位体、安定同位体を含む）を主な手段として新しい分野を切り開いて研究を進めて行こうとする方が望まれる。また、地球環境科学に関する大学院教育に意欲を持ち、学生の教育や研究指導ができる方。

着任時期：平成14年4月1日以降なるべく早い時期

提出書類（A4版）：

- (1) 履歴書
- (2) 研究業績リスト（査読付き論文とその他を分けて記載）
- (3) 主要論文の別刷り（5編以内、各2部）

(4) 地球環境科学に対する基本姿勢（A4版1枚）

(5) これまでの研究と今後の研究及び教育に関する抱負（A4版2枚）

応募締切り：平成13年10月29日（月）必着

書類提出先：〒060-0810

札幌市北区北10条西5丁目

北海道大学大学院地球環境科学研究科

大気海洋圏環境科学専攻

専攻長 山崎孝治

書留送付（封筒の表に「教官応募」と朱書きのこと）

なお、応募書類は返却しない。

電話：011-706-2361

E-mail：yamazaki@ees.hokudai.ac.jp

問い合わせ先：乗木新一郎

電話：011-706-2369

E-mail：noriki@ees.hokudai.ac.jp

URL：http://www.oes.hokudai.ac.jp